

豊明希望チャペル礼拝

2024/9/1

「みことばはますます広まり」

使徒の働き 6 : 1~7

毎月第一週は、使徒の働きから教えられています。イエス様の十字架と復活の出来事のあと、しかし、見えるところのイエス様がおられない中、使徒達をリーダーとし、日々に増えていく、イエス様の贖いの救いの約束によって、神の子、クリスチャンとされていく人々が増え始め、いわゆる、「教会」としての歩みがはじまりました。世界ではじめの教会の誕生であります。

その出来事を、ここまで見てきました。ペテロをはじめ使徒達は、たびたび、エルサレムのイエス様を殺した当局者たちから捕らえられ、イエス様について話すこと、すなわち宣教を禁じられますが、それでも、聖霊の語ることをやめてはならない、御言葉を語り続けよとの言葉を聞いて、命を惜しむことなく、御言葉を伝えていく弟子達の姿は印象的でした。

増え続ける教会には、人間の集団が出来るとき、それは、たとい、クリスチャンの群であっても、問題が生まれました。アナニヤとサツピラの出来事は、その典型的な例でありました。

今日のところでは、そのアナニヤとサツピラの出来事に続く、教会の中での問題が、ルカによって隠すことなく報告されています。それは、アナニヤとサツピラの時がそうであったように、お金の問題と、人間関係の問題でした。人間関係というのは、教会で活躍している同じ兄弟姉妹への嫉妬でありました。また、今日のところでは、それは、似たものでありますが、不公平感から来る、リーダー、あるいは、教会への不平不満でありました。最初の聖句をまず読みます。

「6:1 そのころ、弟子の数が増えるにつれて、ギリシア語を使うユダヤ人たちから、ヘブル語を使うユダヤ人たちに対して苦情が出た。彼らのうちのやもめたちが、毎日の配給においてなおざりにされていたからである。」

今回は、使徒達の思いに迫りまして、日本では明治から、あるいは戦後の宣教師たちが、命がけで日本に来て宣教をしてくださったことに引き寄せて、私たちの問題として、読ませていただきました。



今日は、教会の中に生じた不公平感から来る、教会への不平不満の問題、大きくはコミュニケーションの問題について、まずは、私たちに引き寄せて考えたいと思います。一つの例をあげます。

今、私たちが豊明希望チャペルの、一里塚である、教会史途上の感謝の報告をさせていただきたいと願っていますが、この『信濃教会 75 年史』は、教会の記念誌とは、

かくあるべきだと言われるような、教会の記念誌の一つの理想として語られることもある、その教会史です。

というのは、戦中戦後を経ていることから、日本の戦争に、教会が、どのように預言者的責任を果たせたか、果たせなかったのか、とくに、この果たせなかったのかという、教会の反省すべき内容にも、正直に触れているからです。

私は、それは、この使徒の働きが、それこそ、世界の初めの教会史を発行するにあたって、感謝なことばかりではなくて、こういう不足があった、罪があったということ、正直に書いてくれてあるからです。この6:1にあること、どういう事が起きたのか？その内容も大切ですが、まずは、こういう事が隠さず書いてある、正直な書、それが、教会史たるべきものであって、また、聖書なのだという事を確かに確認しなければならないと思います。

この教会史を少し紹介します。



神学者でもあった、高倉徳太郎牧師を初代牧師とする信濃町教会は、1924年（大正13年）に戸山教会として始まりました。使徒の時代と、日本の大正時代は似た点があります。それは、明治の時代のキリスト教会への偏見の時代から、突如、今と言うリバイバル、言葉をかえれば、キリスト教大流行の時代がいつときあったからです。ただし、この時代の終わりから昭和のはじめにかけては、軍国主義の台頭によって、教会は、むしろ迫害を受けるようになりますが・・・当時、始まったばかりの信濃町教会は、最初30人の礼拝が、6年後の1930年には、200人を超える人々が礼拝に集まっておりました。教会の驚くべき祝福の時代でした。しかし、その頃から教会の中に問題が生じてきます。それは、一言で言って、「交わりの問題」(p74)でした。古い信徒が、昔の「古き良き時代」を「あの時は良かった」

と批判的に語るようになったからです。また、他の教会からの転会者と昔からの信者との間に、感情のずれが生じてまいりました。また、若い人と年輩の人との世代間のギャップもありました。「夜の男子青年会。(青年たち、) 実にイヤな態度、傲慢なり、・・観念的なり・・、終わりにて、(青年を) きびしくしかり飛ばせり。余が妥協的、たががゆるみおるなれば、余を捨てよ。」(1931) と高倉牧師は日記に書いて怒りを表しました。

また、当時の様子を、信徒から見ても、「強いリーダーシップをもって教会の指導牧会に当たってきたかのように見られていた高倉牧師は、・・全く無力同然に見えた。」と、記念誌には正直に書かれます。高倉牧師は、その忙しさの中で、次第に自分の怠惰を責めるようになり、次第に精神を病み(うつ病と報告される・・)、自宅で自殺(1932)するという事態に到ったのです。当時の高倉先生の日記を読むと、説教の準備不足を悲壮な姿で反省しながら自分をむち打つように苦悩します。明らかに病気であり、それは、病死と言えるものだったことがつづさにわかるのです。

これが、書くとすれば、教会が書くべき教会史だと言われる信濃町教会 75 年史です。(豊明希望チャペルのそれは・・・)

この使徒の働き、キリスト教の教会の最初の歴史となる教会史となる書を書くルカも、たしかに、教会を美しく飾り、嘘となってしまうまいように、むしろ、神から出たが、しかし、人間の働きによってでしか築けない限界をもった教会の姿を、しかし、それでも、その人間の弱さや罪を超えて、神が祝して下さった事を、正直に述べるのであります。1 節を読みました。

ここに出てくるのは、ギリシャ語を使うユダヤ人というのは、外国に住むユダヤ人の事です。当時、ユダヤ人の習慣で、金曜日になると寄付をつのり、金曜日にはみんなで、貧しい人たちには、食べ物などを分配して歩いたと言います。そういう習慣が教会にも引き継がれたと思われまふ。特に、夫を亡くして収入のない婦人などには、1 週間分を置いていきました。ところが、「ちょっと、ギリシャ語を使うユダヤ人のやもめの人には少ないんじゃない？」というような誤解も生じたのかも知れまふ。

このトラブルの時、使徒たちがは、このような指示を出しました。これが、当時の教会の対処法でしたとルカは述べまふ。

「6:2 そこで、十二人は弟子たち全員を呼び集めてこう言った。「私たちが神のことばを後回しにして、食卓のことに仕えるのは良くありません。6:3 そこで、兄弟たち。あなたがたの中から、御霊と知恵に満ちた、評判の良い人たちを七人選びなさい。その人たちにこの務めを任せることにして、6:4 私たちは祈りと、みことばの奉仕に専念します。」

前回も見るとおり、使徒達は、御言葉を語る事に命がけでした。まして、そうしたみことばの最前線に立つ使徒達弟子達は、いつ当局に捕らえられるかも知れないと言う、いわばリスクをいつも背負っていました。究極、かれらがいなくなっても、キリストの教会が守られる必要がありました。

今で言う、役員会、執事会のようなものを設けて、執事、長老、役員に、ここ

では、おもに会計的な責任を担わせました。そのようにして、すなわち、いわば、教会の働きを分担させて、コミュニケーションが行き届くように配慮したのです。

このあと、誰が選ばれたか書いてありますが、実際には、ステパノはじめとする何人かのその後の報告を、この使徒の働きに見るとき、彼らは、伝道のはたらきも担っていたことがわかります。

次のところに、だれが選ばれたか名前があげられています。

(↓ステパノ)「6:5 この提案を一同はみな喜んで受け入れた。そして彼らは、信



仰と聖霊に満ちた人ステパノ、およびピリポ、プロコロ、ニカノル、ティモン、バルメナ、そしてアンティオキアの改宗者ニコラオを選び、6:6 この人たちを使徒たちの前に立たせた。使徒たちは祈って、彼らの上に手を置いた。6:7 こうして、神のことはますます広まっていき、エルサレムで弟子の数が非常に増えていった。また、祭司たちが大勢、次々と信仰に入った。」

この中で、この後、特に触れられている人物は、ステパノと、ピリポです。他は特に触れられませんが、「アンティオキアの改宗者ニコラオ」と出身地まで書いてある人物は、このニコラオだけです。明らかなギリシャ名の名前とわかるのは、ステパノとピリポなどです。この中で、おそらく、ユダヤ出身のヘブル語を話す、きつすいのユダヤ人だとわかるのは、名前からテモンだと思われています。

要するに、この選ばれた代表者たちは、ギリシャ語を話すユダヤ人と、ヘブル語を話すユダヤ人と、ユダヤ人として生まれていない、異邦人からクリスチャンとなって人の三種類の人たちによって、構成されていたことがわかります。

あきらかに、ギリシャ語を話すユダヤ人、ヘブル語を話すユダヤ人、さらには、異邦人のクリスチャンと、このコミュニケーションの問題が解決するように、群を代表、代弁する人たちがバランス良く選ばれていたことが想像出来ます。

これは、人間の知恵ではありますが、こうした、人間的な愛と、配慮が図られていたことを見る事は、今の教会にとっても意味あることでしょう。

また、ここの7節でなにげに、「また、祭司たちが大勢、次々と信仰に入った。」と、教会を迫害する当局側、時の為政者でもある祭司たちが入っている事は、御言葉がいかに深く理解され、祭司が、自分たちのこれからの歩みに不利と知りながら、あるいは、その職を、もしかしたら、辞してまで、よく理解し、決断して、クリスチャンになったと思われるのであって、教会はその数の面だけでなく、その質、あるいは、深さにおいて、十分に心に深く、そして、人生に食い入るほどに、御言葉が理解され受け入れられていったのがわかるのであります。

さて、ここまで見てきましたが、この報告が、非常に気になる、しかし、とても重要な視点で、書かれている点に、最後に心をとめたいと思います。ここです。

「6:7 こうして、神のことはますます広まっていき、エルサレムで弟子の数が非常に増えていった。」

:7「・・・エルサレムで、弟子の数が非常にふえて行った。」そして、その報告と併(あわ)せて語られるここです。「**こうして神の言葉は、ますます広まっていった。**」

そして、教会員の数も増えた。それで教会は数が増えました、教会は成長しましたというのではなくて、まずルカがどうしても伝えなくてはならないことは、こういう困難な状況の中でも、何よりも神の言葉、御言葉が、広まったと言うことなのです。そこには、使徒たちの努力とか才能とか決断とかということを超えて、御言葉そのものの力、内にも外にも何にもさまたげられることなく広がっていく、不思議な神の言葉（聖書）の力を、ルカは見ているように思うのです。教会は、どんなに規模が大きくなっても、その結果、社会的影響力や発言力が増したとしても、

御言葉が伝えられ、その御言葉が、クリスチャンの心に根を下ろし、まさに、御言葉が力をもって、教会を形成していくのでなければ、意味がないということではないでしょうか。ルカは、この世で始まった教会の姿を、そこをみていたということです。

さて、教会の初期の時代に起きた、教会におきた問題を通して、人の弱さと、しかし、それでも力強く祭司の心まで深く浸透し、また、教会を力強く築いていく建てあげていく、みことばの力、御言葉に働く神の力、御霊の力、キリストの臨在の大きさを今日、見せていただいたのです。

今週の歩み、私達も、私達も、神様に、また御言葉の力を真剣に信じて本気で神様に信頼して歩いていくクリスチャンとして歩いていきたいと願うのであります。